

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23275

研究課題名（和文）社会運動を語る女性たち：台湾ひまわり運動・香港雨傘運動における文化実践を事例に

研究課題名（英文）Female's Subculture Practices in social movements: a case study of the Sunflower Movement and the Umbrella Movement

研究代表者

陳 怡禎 (CHEN, IChen)

日本大学・国際関係学部・助教

研究者番号：30845722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2014年の「ひまわり運動」（台湾）、および「雨傘運動」（香港）を考察することを通して、現代社会運動の担い手である若者、なかでも特に女性参加者はいかに、自分自身の日常的趣味を用いて社会運動について語り続けているか、さらにその語りを通して、社会運動に意味を付与しているかについて考察することである。本研究は、主に以下の2点の研究成果を示した。(1)社会運動に参加している台湾や香港の若者、中でも女性は社会運動空間において、文字、二次創作、言説を通して「語り合い」を行い、情動を生成しながら社会運動に意味を付与した。(2)社会運動参加者は、「日本」のサブカルチャー記号を用いて対抗を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果は、以下の3点の学術的意義や社会的意義を持っている。第一に、台湾や香港の若者は、「日本」記号を用いて「中国」に対抗を示すことを明らかにすることを通して、東アジアにおける政治・文化的力関係の力学を明らかにした。第二に、台湾や香港の若者は、サブカルチャーや流行文化を用いて政治に参入することを通して、「政治」に新たな意味を付与したことを明らかにした。第三に、現代の社会運動に参加している若者たちは、あえて既成的な社会構造の「周縁」にとどまり、文化実践を通して異議申し立てを行い、「対抗」の新しい手段を生み出したことを示した。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on the social movements of young females in Taiwan and Hong Kong. The "Sunflower Movement" in Taiwan and the "Umbrella Movement" in Hong Kong served as the two case studies.

Through analyzing the communication methods utilized by the participants, the study discovered that the younger generation in Taiwan and Hong Kong brought a fresh perspective to social movements due to their personal experiences and cultural practices. The participants of these social movements also used the symbol of "Japan" as a means of expressing their dissent towards the government.

研究分野：カルチュラル・スタディーズ

キーワード：サブカルチャー 社会運動 台湾 香港 社会運動におけるコミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

研究者は修士課程以来、ファン研究やサブカルチャー研究を中心に研究を進めてきた。2014年に出版した『台湾ジャニーズファン研究』(青弓社)では、台湾において活発に行われるファン活動に熱心な女性ファンたちを研究対象として、彼女たちは、アイドルを通して、理想な親密関係を構築しようとする点について分析している。

研究者の書籍が出版された年に、台湾のひまわり運動や香港の雨傘運動が起きた。研究者は日本にいながら、インターネット中継を通してそれら2つの社会運動を観察していた。そこで興味深く感じたのは、以下の2点であった。第一に、近年では、ユーモアセンスが溢れる「新しい社会運動」、または、「新しい文化=政治運動」(毛利 2003)が潮流となっているなか、台湾や香港の社会運動参加者は、さまざまな文化を用いてコミュニケーションを取っていた点である。シリアスな抗争場面もしばしば見受けられているが、それらの社会運動参加者コミュニティには、「笑い」や「遊び」が多かった。その点は、従来の台湾や香港、さらにいえば東アジアの社会運動や政治活動のなかでも特徴的であった。第二に、台湾や香港の社会運動参加者が行った遊びには、日本発のサブカルチャーが活用されていた点である。例えば、2つの社会運動が長期戦になるにつれ、運動に参加している若者、なかでも特に女性たちは、日本のアニメキャラクター、アイドル文化などを用いて、社会運動の新しい形を作り上げていった。

以上のような状況を踏まえて、研究者は、こうした台湾や香港の若者たちによる、社会運動空間における文化実践に着目し、サブカルチャーと社会運動の接点を探ってみようと考えたことが、本研究の着想に至った背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代の社会運動の担い手である若者、なかでも特に女性はいかに、自分自身の日常的趣味を用いて社会運動について語り続けているか、さらにその語りを通して、社会運動に意味を付与・修正しながら、新しい「つながり」を構築しているかについて考察することである。手がかりとしては、前述した2014年3月に台湾で起きた「ひまわり運動」、そして9月に香港で起きた「雨傘運動」の運動現場に注目し、その運動空間に行われる文化実践について考察する。なかでも本研究は、とりわけ女性によって行われる文化実践に焦点を当てる。女性達が「公」に属する男性主義的な社会運動空間に、「私」的趣味を持ち込み、「かわいい社会運動」を作り上げる事例について検討することによって、本研究は、「家族主義」や「家父長制」という特質がしばしば強調されている(Lau 1983; 李 1989; 落合 2013; チャン 2013)東アジア社会における女性達は、いかに政治や文化、そしてジェンダーという3つの側面に潜んでいる家父長制に対抗しようとしているかを分析することを目的としている。

具体的に、本研究で明らかにしたい3つの「対抗」図式は以下のとおりである。

(1)政治面における「対抗」：ひまわり運動や雨傘運動には、様々な面で二元対立構造の図式が働いている。それは、世代での「若者対大人」、政治面での「市民対政府」、本土意識での「台湾人や香港人アイデンティティ対中国」などの二元対立構造が観察される。本研究はまずこのような政治面における「対抗」について明らかにする。

(2)文化面における「対抗」：それぞれの運動空間では、大量の芸術作品が創作されていたが、数多くの展示物の中に、日本アニメや漫画のキャラクターを利用して二次創作するものが多かった。運動参加者はあえて自らの日常を社会運動空間で再現しようとしているなか、日本のサブカルチャーを利用して創作することによって、社会運動に絶えず意味を付与・修正していると見られる。日本のキャラクターを利用して社会運動を語る点について、本研究は、社会運動の担い手である若者達が、長い歴史にアンダーグラウンドで流通していた日本文化から、反逆といったメッセージを読み取ったため、あえて日本という対抗的コードを取り入れて「中国」に対抗しているのではないかと仮説を立て、東アジアの歴史や文化流通といった側面から「日本」記号の意味を考えた。

(3)ジェンダー面における「対抗」：さらに、本研究はとりわけ女性を研究対象として研究を進めたい。女性たちは、男性中心主義の社会運動空間に居場所を探りながらも、日常生活に実践している「私的趣味」を、非日常的な空間だと言える社会運動に持ち込んでいた。彼女たちはこういった文化実践を通して、「私的領域・公的領域」「日常・非日常」の境界線を曖昧化しようとしていると言える。言い換えれば、社会運動参加者の女性は、文化実践を通して、家父長制に異議を唱えているのではないかと仮説を立て、研究を進めた。

本研究は、このような「台湾・香港対中国」「日本のサブカルチャー対中国文化」「女性対男性中心主義」といった3つの「対抗」図式の相互関係を明らかにした。

3. 研究の方法

本研究は主にフィールドワークを中心に研究を行う予定だったが、新型コロナウイルスの影響

響で海外渡航ができなかった影響で、台湾や香港現地への訪問の実現が困難な中、テレビ電話を利用したインタビュー調査（10名）、デジタルアーカイブでの分析、新聞記事などの2次資料の収集や分析など、マルチな手法を用いて研究を遂行した。また、新型コロナウイルスの影響が緩和された2022年に台湾を訪問し、社会運動が行われた場所を訪れ、現地で10名の参加者（なかでも特に女性）にインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

本研究は、第2項の「研究の目的」で示した3つの「対抗」図式を考察し、主に以下の3点の研究成果を示した。

第一に、社会運動に参加している台湾や香港の若者、中でも特に女性は社会運動空間において、文字、二次創作、言説を通して「語り合い」を行い、情動を生成しながら社会運動に意味を付与した。これまでの先行研究では、社会運動参加者は、参加者コミュニティの外部に向けて宣伝をしたり、「会話」を求めたりし、社会運動の拡大を図ったことについて議論されてきた。しかしながら、本研究では、社会運動に参加していた台湾や香港の若者たちは、社会運動が掲げている目標や訴求というより、「なぜ自分が社会運動に参加していたか」「社会運動に参加した後の生活の変化」など、自らの「日常」についての語りを参加者同士の間で共有する傾向を明らかにした。つまり、本研究で明らかにしたのは、台湾や香港の若者たちは、「内部向け」のコミュニケーションをより重視し、さらにこうした「内部向け」のコミュニケーションを通して、「社会運動/政治運動」に多様な意味を付与している点である。

また、本研究にてとりわけ注目したのは、台湾や香港の社会運動参加者が、社会運動空間における「語り合い」を通して、個人の情動を共有し、さらに、それらの情動に上位的価値を付与し、2つの社会運動の中心的理念として捉えていた点である。それらの情動は、憤怒や情熱など、これまでの社会運動や政治活動において重視されてきた、「出来事」に触発されて生成したのではなく、「愛情」や「気遣い」などの日常的なものである。元々異なる社会背景や参加動機を持って集結する運動参加者たちは、同一の目標に向かって憤怒や情熱といった情動を共有するというより、彼らがより重要視しているのは、愛の感覚や気遣いが欠かせない「対話」によって生成した様々な情動だといえる。この点は、現代における「新しい社会運動」の実践の特徴のひとつだといえる。

第二に、台湾や香港の社会運動参加者は、「日本」のサブカルチャー記号を用いて対抗を行った点を明らかにし、中華圏国家や地域における「日本」という記号の意味を、ポストコロナリズムの視点から検討した。考察した結果、伝統中華文化を「公的記憶」として政治権力によって共有されている台湾や香港社会では、若者たちに能動的に共有されている「私的記憶」は、「日本」や「日本のサブカルチャー」であることが明らかになった。すなわち、台湾や香港の若者たちにとって、「政治的/公的/一元的」伝統中国文化や価値観に異議を唱えるため、「個人的/私的/多層的」文化を象徴する「日本のサブカルチャー」は、一種の「対抗」記号となる。さらにいえば、台湾や香港の若者たちは、「日本」記号を用いて、「本土意識（台湾や香港という土地に対するアイデンティティを指す。こうしたアイデンティティは、エスニシティや国家アイデンティティとは異なるものであり、台湾や香港特有の「帰属意識」だと考えられる）」を構築していたと考えられる。具体的に、本研究は、台湾や香港の若者たちが、日本のマンガ、ドラマ、アイドル文化などのサブカルチャーを能動的、主体的に消費することを通して、常民的共同記憶を作り上げ、さらに自らの台湾や香港という土地への帰属感を構築し、特殊なアイデンティティを形成してきたことを考察した。

第三に、本研究はとりわけ「女性運動参加者」に焦点を当て研究を進めた研究成果として、以下の知見を得ることができた。本研究はインタビュー調査を通じて、運動に参加していた女性が、どのように自分の社会運動空間の中のポジションを語るかについて考察した。その結果、女性たちは、社会運動を実践する際に、常に男性を主体とした社会構造からの眼差しによって自らの位置付けを調整している。しかしながら他方では、彼女たちは、周縁化されたことを巧みに用いて、「戦術/戦略」的に男性支配の社会運動空間から距離を取って周縁に立っていたことを明らかにした。また、本研究で得た最も重要な知見としては、社会運動に参加した彼女たちが「戦術/戦略」的に「周縁」ととどまる選択を行い、その周縁において日常的趣味実践を通して、自らの存在を可視化しながら、中心的権力を周縁から少しずつ分散させた過程である。

研究を通して明らかになったことは、台湾や香港の女性社会運動参加者は、日本のサブカルチャー（アイドル・ファン文化やアニメ漫画文化など）といった彼女たちの日常的趣味を用いて、ジェンダー面における対抗を実践したことである。具体的に彼女たちは、一方で、元々男性が優位を占める趣味や文化実践という領域における、女性による趣味共同体を可視化させようとしていた。また他方では、彼女たちが自らの趣味や遊びを武器として用い、男性支配の社会運動という空間に参入していった。こうした二重の対抗を通して、女性は、社会運動の「中心-周縁」、さらに言えば、社会構造の中での「男性-女性」という権力の強弱の二項対立の局面を解体しようとしていた

以上で得た知見を基にした研究成果は、雑誌論文3点、学会発表12点、図書3点（報告書の第5項を参照）がある。また、それらの研究成果に基づき、学位論文（タイトル：『東アジアの社会運動とサブカルチャー実践——台湾ひまわり運動・香港雨傘運動を事例に』）を完成し、博士

学位を2023年に取得した。

さらに、本研究で得た知見を踏まえた上で、研究者は、更なる発展的な研究を行うため、2020年度若手研究『社会運動空間における「趣味共同体」に関する研究 近代東アジア社会運動を事例に』（課題番号20K13706）そして、2023年度基盤研究C『「周縁にとどまる」という対抗戦略をめぐって：社会運動における趣味実践に関する研究』（課題番号23K01734）研究費を取得し、上記で示した研究成果である「政治面における対抗」や「文化面における対抗」、「ジェンダー面における対抗」について研究を深化させ、「社会運動以前と以降」（時間軸）や「諸国との共振」（空間軸）を俯瞰する発展的研究を図っている。

具体的に、本研究は、主に台湾や香港の社会運動に焦点を当て、事例研究を行ってきたが、以下の2点の課題が残されていると考えられる。第一に、それらの社会運動が起きた2010年代以前の台湾や香港社会の社会文化の変遷や、日本大衆文化のアジアにおける流通史をさらに一般的に考察する必要がある。第二に、本研究で得た知見は、台湾や香港をはじめとする中華圏社会特有の文化現象なのか、それとも東アジア全体にも観察されるものなのかを更に考察すべく、本研究が注目してきた社会運動と他国との相互影響について検討していく必要がある。

そのため、研究者は、本研究で得た知見を用いて、今後は、「社会運動の以前と以降」（時間軸）や「アジア諸国との共振」（空間軸）を俯瞰する発展的研究を行っていく。これらの分析を行うことで、より高い水準の成果を生み出し、社会貢献性を高めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 陳怡禎	4. 巻 41
2. 論文標題 社会運動空間における女性参加者のあり方 台湾ひまわり運動を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係学部研究年報	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳怡禎	4. 巻 4
2. 論文標題 社会運動を語る若者：台湾ひまわり運動・香港雨傘運動を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新社会学研究	6. 最初と最後の頁 141-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳怡禎	4. 巻 10
2. 論文標題 社会運動空間における「女性の遊び」 台湾ひまわり運動を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 女子学研究	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 台湾ひまわり運動における “アイドルファン” 現象
3. 学会等名 表象文化論学会第15回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 台湾ひまわり運動・香港雨傘運動における「対話」と「情動」
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動を「語る」－台湾ひまわり運動における「内向的コミュニケーション」に焦点を当てて－
3. 学会等名 北東アジア学会関東地域研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動を語る女性参加者 - 社会運動空間における「趣味共同体」に関する研究 -
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会 2020年春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動空間における「女性像」に関する考察 - 台湾・ひまわり運動を事例に
3. 学会等名 北東アジア学会第26回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 「かわいい社会運動」の作法 - 社会運動参加者による「語り」の意味を考察することを通して
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会 2020年秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 「かわいい」社会運動の作法 台湾ひまわり運動における趣味共同体を事例に
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動を語る女性たちー台湾ひまわり運動における文化実践を事例に
3. 学会等名 日本大学学部連携ポスターセッション
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動を語る若者 台湾ひまわり運動・香港雨傘運動を事例に
3. 学会等名 第92回日本社会日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 社会運動空間における「女性の遊び」
3. 学会等名 女子学研究会第47回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 アジアの政治運動とサブカルチャー実践 問題提起 (ネットワーク社会研究部会ワークショップ)
3. 学会等名 日本メディア学会 2022年春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 陳怡禎
2. 発表標題 東アジアの政治運動とサブカルチャー実践
3. 学会等名 日本大学Web研究発表会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 遠藤 薫編 (遠藤薫、木本玲一、田頭慎一郎、中田喜万、大山昌彦、周東美材、塚越健司、大尾侑子、陳怡禎著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 戦中・戦後日本の 国家意識 とアジア	

1. 著者名 山崎敬一 , ビュールクトーヴェ , 陳海茵 , 陳怡禎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科	5. 総ページ数 306
3. 書名 埼玉大学教養学部 リベラル・アーツ叢書14 観客と共創する芸術 II	

1. 著者名 田島悠来 (編集, 著), 上岡磨奈 (著), 石井純哉 (著), 香月孝史 (著), 青田麻未 (著), 関根禎嘉 (著), 大尾侑子 (著), 陳怡禎 (著), 松本友也 (著), 中村香住 (著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 アイドル・スタディーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------